１．発端(2007/4/中旬)

関西では、かなり有名な私立大学文系の 4 年生である藤田幸恵は、先日訪問した会社から、『これからのあなたのご多幸をお祈りします』の手紙を受け取って、ため息をついた。これで、５社目の丁寧な“お断り”を貰ってしまった。昨年の 11 月頃には、

「私達に対する企業の人達の、熱い目つきを見ていれば、就職等は楽勝」

と思っていた。しかも学校のキャリアセンターでは、

「あなたと同じような成績では、昨年ここと ここに就職している。今年は更に求人の勢いがある。」

と言われて安心していたのに、５回も『お祈り』を頂くと、明るさを自認している幸恵でも、大分落ち込んでしまった。

そこで、ブティックを経営している母の一言を思い出した。

「店のお客さんのご主人で、就職指導に関してかなり詳しい人がいる。あなたの事を聞いて、一寸興味を持っているようだから、一度お願いしてみたら。」

実は、幸恵もその人は、アルバイト先のイタリア料理店で、一度見ていた。正直頭の毛が薄いぱっとしないオッサンだと思っていた。しかし、今の状況を何とかしたい一心で、家の近くの喫茶店で一度会ってみることにした。

指定された店に、少し早く行って待っていると、件のオッサンが現れた。店のマスター達とも知り合いのようで、混んでいたが奥の方の話しのできる席に座らせてもらった。オッサンがオーダーについて話しかけてきた。

「この店のアメリカンは、本当にアメリカン用の豆を使っていて、ブレンドも美味しいです。」

「私は、ブレンドでお願いします。」

「それでは、私はアメリカン、こちらにはブレンドをお願いします。」

オーダーを受けた、アルバイトの子が下がると、話が始まった。

「はじめまして。家内がお母さんにお世話になっている、田中和夫です。一応キャリアコンサルタントの資格は持っていますが、ここでは知り合いとしてお話ししましょう。」

幸恵は、母から聞いた田中の話を思い出していた。元は大手電機メーカーの社員で、社員教育などのセクションにいたらしい。しかも、大学での講師経験もあるということであった。自分たちの世代との話し方は慣れていると聞いていたので少しは、気が楽であったが、何から話してよいか少し戸惑いがあったので、とりあえずよろしくお願いしますと答えた。田中は、話し続けた。

「この店はいい器を使っていますよ。大倉陶園やウエッジウッドの１級品を惜しげもなく使っています。」

幸恵も何となく雰囲気がわかったので、

「そのようですね。」

と答えておいた。すると、田中がいきなり本題に入ってきた。

「失礼ながら、藤田さんはどのような会社を、志望されていますか。」

幸恵は、今まで訪問した会社を正直に言った。すると、田中の目つきが少し鋭くなって、

「この会社は、あなたが選んだのですか？」

と質問が来た。

「はい、学校のキャリアセンターに相談しながら選びました。」

すると、田中が複雑な笑みを口元に浮かべて聞いてきた。

「この会社は、どれもしっかりした会社ですが、業界では中堅どころか、大きな会社の子会社ですね。」

「そうなんです。私は部活に力を入れすぎて、成績があまり良くないのです。TOEIC も 600 点くらいしかないし。…」

幸恵は、少しくやしかったが正直に自分の成績は、同級生の間では並みであることを認めた。クラスの中には学生時代に海外でホームステイ経験がある子が半数ぐらいを占めていた。従って、TOEIC は 800 点が最低ラインと言う雰囲気があり、成績ではあまり大きいことはいえないと、自分でも認めていた。そこで、田中が切り返してきた。

「大手メーカーの方が、入り安いですね。」

幸恵は耳を疑ったので、本当と訊いてしまった。そこで田中の演説を拝聴することになった。

「まず、大手メーカーでは事務職でも、百名単位の採用枠があります。一方、小さい会社では、十

名単位から一桁の採用の場合もあります。この違いは大きい。つまり、大きな会社の採用は多様性を受け入れますが、小さい所では、必要人材の条件を絞り込んでいます。網で掬うところと、目的を決めて一本釣りを行う場合の違いです。また、大手会社と小さな会社では、仕事の仕方も違います。大きな会社では、今までの蓄積が多く、前例を理解し、多くの人と協調しながら仕事を進めることが必要です。一方、小さな会社の場合、一人で見る範囲は、やはり多くなります。そのため、大きな会社では、指導者や周りの人の指導を上手に受け入れる、協調性というかコミュニケーション能力が重視されます。一方、小さな会社では、仕事に関する必要な能力が、全て身に付いている必要があります。例えば、英語が要ると言えば、ネイティブと喧嘩が出来るレベルでしょう。しかし一方で、自社の業務に関しても、適切な知識が必要になります。大きな会社では、能力を見て適当に当てはめることができるので、ある意味では入りやすいのです。」

幸恵もこの話には、少し納得した。しかし次の質問は、聞かずにはおれなかった。

「でも誰でも入れるわけではないでしょう。」

田中は笑って答えた。

「確かに、これだけは突破しておかないといけない、必要条件はありますよ。実は、この席でも貴女は、その一つをクリアしようとしています。」

幸恵は、少し緊張した顔になった。そこに田中の話が続いた。

「先ほども言いましたように、この店では、大倉陶園などの１級品を使っています。豆も本物のアメリカンの豆です。お湯割りや、ブレンドの豆を少なくして、アメリカンとしている店が多いですが、ここではそのような妥協はしていません。1 級品を作るところは、妥協なく世界一のレベル目指さないといけない。またそのような１流に対する敬意を持たないといけない。これが出来ない人は、どうしても成長に限界があります。また、先輩の良さを認識できなくてトラブルを引き起こすことがあります。1 流の世界を理解できること、妥協しないことは一つの必要条件です。貴女には、その素養があると見ました。」

幸恵には少し思い当たることがあったが、何も言わずにうなづくだけにした。

「そのほか、やはり一般的な能力検査と言うか適性検査で、適度な値をクリアしてもらう必要があります。これは、学校の方でも指導を受けていますか。」

幸恵は、ＳＰＩ等の事前訓練に関しては、かなり否定的な意見を持っていたので、はっきりと言った。

「そのような講習会はありますが、そこで点を上げて何になるのですか？実力もないのに点だけ取るのは間違っていると思います。」

そこで、また田中は不思議な笑みを浮かべた。

「その心がけは、半分よろしい。しかし理解不十分。」

「なぜですか？」

「このような学習訓練の効果を、貴女はどう見ますか。」

「それはやったなりの効果が出るでしょう。」

田中の顔が急に厳しくなった。

「貴女は学習と言うものを、深く理解していない。学習は、直線的に成果がでるものではない。例えば、ＳＰＩ　等の能力検査では、『あるパターンの問題が出る』と知っているだけで、かなり成績が上るが、その後はかなり訓練を積まないと、上積みは難しくなります。ところで、それなりの能力がある人が、そのパターンに慣れていないだけで、成績が悪くて、入社試験に落ちるのは、不運と思いませんか。」

「それはそうですね」

「適性検査の訓練ばかり行うのは、付け刃です。しかし、パターンを勉強して、最初の関門を開けておくのは、適切なことだと思います。TOEIC でも 2 回目はかなり成績が上ったでしょう。　付け刃は困るが、ある意味で、包装紙ぐらいははがしておく準備も必要でしょう。」

「解りました。考えが甘かったです。」

田中の顔に笑みが戻った。そして続いて言った。

「但し、性格試験の問題は練習すると逆効果になりますね。あの手の問題は、初めて出会ったときの戸惑いも想定して作ってあります。何度も受けているとそれだけで、鈍くなってきますから、判定が常識的な線に収まってしまいます。これは見る人が見れば解りますね。」

「ありがとうございました。とても参考になりました。」
そこで田中から宿題が出てきた。
「それでは、これから毎日800字から1600字の文章を、手書きで書く訓練をしなさい。」
「手書きですか？」
「手書きです。なぜなら小論文試験は全て手書きです。その時、今のようにパソコン慣れしていると漢字を忘れていて満足に書けません。さらに、手の筋肉自体が２千字も書けば、引きつってしまいます。そのためにも毎日書く訓練を続けておくのです。それからもう一つ、面接の訓練として、友達と組んで模擬面接を行いなさい。特に、面接官の役を演じた時にどう感じるか、味わって見なさい。そうすれば、こう話した方が良いということが、自然にわかるでしょう。」
幸恵にとっては、納得のいく話しであった。特に、面接官の立場に立ってみる、という話しには自分が今まで見落としていたものを教えられたと思った。田中は、名刺に書き込みをして渡しながら、更に続けた。
「ここに、私のメールアドレスとブログのアドレスがあります。私のような会社人間の発想を知るためにも、ブログを読んで見なさい。それから、メールで連絡ください。メールのやり取りでも大人との話の仕方に慣れることが出来るでしょう。」

２．展開
幸恵は、田中の話が一々もっともだと思ったので、家に帰って早速、小論文を書いてみた。確かに漢字を忘れているな、手もだるくなるなと苦笑をしてしまった。このような準備をするのとしないのでは、やはり違うのかなと思った。また指定された、ブログを見てみたが、色々考えているなと言うのが、正直な感想であった。ただ、何箇所か就職試験向けの記事があり参考になるとおもった。
次の日、学校に行き、気の合う知美を捕まえた。知美も、ここ数件面接で失敗していたので、相互のロールプレイングには興味を持った。そこで、幸恵が面接官役になって、知美の話を聞くことになった。しかし、知美の志願理由があまり良くわからないために、つい色々と訊いてしまった。幸恵はそのつもりがなかったが、被面接者役の知美には圧迫面接と感じたらしい。知美にそのことを指摘された幸恵は、かえってショックを受けてしまった。知美にも、正直にあなたの言っていることは、よく解らないと言って二人とも落ち込んだ。気をとりなおして、二人の役を交代して、ロールプレイを継続すると、知美にも幸恵の言っていることが、よく理解できず色々と質問を受けてしまった。流石に、幸恵は自分が前に面接官役を行っただけに、圧迫面接とまでは言い切れなかったが、やはり理解されなかったことを再認識した。
二人は、今まで圧迫面接と思っていたのが、普通の面接に過ぎないことを知り、少し考えが変わった。そして面接官の立場も考えて話をするのが大切だと思った。また、知美の声がすこし高く気になった。帰ってから、このようなロールプレイをしましたと、田中に報告のメールを送った。友達や大学の先生へのメールにはなれていたが、年上の会社員に対するメールの経験がなく、気を使って、何度も文章を直してしまった。
「田中和夫様
藤田幸恵です
先日は、お忙しい所、私のために時間を割いていただき、ありがとうございました。
今日、学校で友人と、面接のロールプレイを、実行してみました。今まで私は、面接官の立場に立って考えたり、どのような答えが、望まれているのか、どのように話すと、解りやすいかと考えることができていなかったと、考えてしまいました。また友人の声を聴いていると、上ずっていて聞こえにくいことにも気がつきました。今まで面接官に不快な思いをさせていたかもしれないと、反省しました。貴重なお教えありがとうございました。これからもよろしくお願い致します。」

翌日、次の返事が来た。
「藤田幸恵様
田中和夫です
早速実習していただいたとのこと､嬉しく思います｡しかも面接官の立場に思いやりが出来たのは、大きな成果です。なお、面接の時には姿勢も注意してください。背筋を伸ばし、腹式呼吸で声を出

すことは、落ち着いてとおりの良い声で話すことが出来ます。お友達の声が、上ずって聞こえるのは、胸式呼吸だからではないですか。貴女は、腹式呼吸が出来ているようなので、前にお会いした時に、注意しませんでした。出来れば、腹から声を出す方が面接官に届きは良いですね。腹式呼吸には、精神を落ち着ける効果があるので、一石二鳥です。

貴女の中にある、良いものを信じてこれからもがんばってください。なお、手書きの練習は続けていますか。継続は力です。」

幸恵は、これを見て少し元気になった。そして、田中に言われたように、SPI の攻略本も一応目を通してみることにした。そして、小論文の練習を手書きで行おうとしたが、書き出した内容が気に入らず、何度も書き直すことになった。パソコン上なら、直ぐに切り貼りで修正できるのにと、恨めしい思いをした。また漢字が思い出せないので、いらいらする思いをした。

さらに、何を書いたらよいのか、色々と迷うことが多く、もう一度田中にメールで問い合わせた。

「田中和夫様

藤田幸恵です

何時も、ご指導いただきありがとうございます。

さて、今日から手書きの練習を始めました。確かに漢字を忘れていました。教えていただき助かりました。

ただ、小論文として、何を書いたらよいのか、よく解りません。人に聞くと新聞の社説を写せという人もいますが、それでよいのでしょうか。お時間ありましたら教えてください。」

田中は、このメールを見て、大体予想どおりの展開となったと一人で微笑んだ。そして次のメールを送った。

「藤田幸恵様

田中和夫です

練習が続いていることを知り、安心しました。確かに新聞の社説を自分の手で書き写すのもよいう訓練です。しかしこの効果は半年後ぐらいに出るでしょう。そこで、少し早く効果が出る方法を、お教えしましょう。

大学受験用の小論文の教材を使うのです。私が見て使いやすそうだと思ったのは、出口汪著の『出口 小論文講義の実況中継(2) 知識情報編：語学春秋社』に書いている論題です。この本のストックノート作成法自体も、身につけると今後のためにもなりますが、とりあえずこの本の後ろの『知識情報篇』に書いている、小論文の材料を一通り理解しておきましょう。これだけでも、小論文の材料が増えると思います。また、面接時の話題も増えるし、集団面接でほかの人の発現いついても、理解する糸口が開かれると思います。

なお、この部分は 50 ページぐらいです。これぐらいは、1 時間程度で読めるスピードは身につけるようにしてください。速読法も大切なスキルなので、習得しておくことをお勧めします。

しかし最初から、スピードが出ると期待してはいけません。最初は、上記の本の後ろのバイブルカードを手で写しながら読んでください。ノートを作る精読をした上で、速読ができるのです。いきなり結果を求めるのでなく基礎の上に力がつくのです。

それではがんばってください。今週末でもまたお会いしたいですね。」

このメールを受けた、幸恵は小論文と面接の関連を改めて考え直した。確かに論文にかけるほど考えたテーマに関しては、面接でも意見が言えるし、他人の意見も理解しやすい。集団面接でも、多様なことも、よく理解している人間は、光って見えるという感じがした。今まで、集団面接で差がついているなと感じていたが、その理由が少し解った気がした。このようなことを、しっかりした言葉で教えてくれる助言者に出会えたことに感謝して、次のメールを送った。

「田中和夫様

藤田幸恵です

何時も、ご指導いただきありがとうございます。

小論文のテーマを多く理解しておくことは、面接で幅をつけることにも繋がりますね。今まで学校で、勉強している時には、一つ一つの分野を学ぶのですが、このような総合的な目で考えていませんでした。

また集団面接では、私はあまり良い評価を頂いていませんでした。確かに光って見える人がいるのですが、なぜか理由が解りませんでした。教えていただいたことで、なぜ差がついたか解ったように思います。理由が解れば、自分で何とかできます。教えていただきありがとうございました。

なお、今週末にお時間いただけるとのこと、ありがとうございます。よろしければ、私のアルバイト先のイタリア料理店ならば、シェフにお話いしておきますが如何でしょう。

これからもよろしくお願い致します。」

これを見て、田中は予想以上の展開に喜んだ。そして、次のメールを送った。

「藤田幸恵様

田中和夫です

私の言いたいことを、100％以上理解していただき、実行していただいている様子を見せていただき、大変嬉しく思います。貴女が部活に力を入れいたことは、努力する力を身につけているようですね。これは貴女の大きな財産です。努力する能力が身に付いている。これは、エントリーシート作成や、面接の時にＰＲしていくべきです。

なお、週末の件、貴女がアルバイトしている店でのお食事かまいませんね。午後 7 時からで貴女と私の 2 人で予約して下さい。楽しみにしています。

それではがんばってください。」

幸恵はこのメールを見て、「この人は、私のことを、認めてくれている」と感じて、嬉しくなり、その日一日気持ちが落ち着いて、大学の講義と小論文の練習にはげむことが出来た。

３．レストランにて

幸恵は、バイト先のレストランには、今日は休みをもらって、知り合いと食事をする旨伝えておいた。シェフも快く認めてくれ、「がんばって」と言ってくれた。当日は少し早い目に来て、席を取りドアの所で待っていると、田中はきちんと 6 時 55 分に出現した。このような時間管理も、無言で教えてくれているのだなと、幸恵は少し緊張した。

席について、オーダーをしたが、幸恵も緊張しているのであまり食べられなく、フルコースではなく、魚のコースを依頼し、飲み物もアルコールは遠慮して、ウーロン茶にしたいと言った。田中も酒は弱いのでと言いながら、同じオーダーにした。そこで田中が、一言言った。

「私は不器用なのでお箸をいただけませんか」

この店では、時々そのような客があるので、接客の子は不思議がらずに箸を持ってきた。

前菜から始まる、料理は美味しく、田中も良く食べたが、食べながら今までの幸恵の勉強や、就職活動について、色々と聞き出してきた。幸恵は今の大学には提携高校の特進コースから進学したので、大学の受験勉強はあまりしなくて入学できたこと、を話した時田中の顔が少し険しくなった。

「その話しは、外見上は不利ですね。大体今の若い人達は、あまり努力しない風潮がある。そこで、大学入試で難しい大学に入った子は、せめて受験勉強だけでも努力している。有名校の出身者を企業が欲しがるのはこのような側面もあります。もっとも体育会系で、日本一のレベルになった経験があると、十分な努力経験があると見ますがね。」

「それで、前のメールでエントリーシートに書くようにおっしゃったのですね。」

「そうなんです。一番困るのは、低いレベルのリーグでトップになった人です。そこより上に行く向上心があればよいのですが、時には『自分のレベルで、成果を出せるようにしない、会社が悪い』と言う言い方をする子がいるのです。日本の市場は開かれていますから、海外からどんどん進出してきます。例えば、裁縫等の手仕事は、中国やベトナム等のものすごく手が器用な人たちが、安い賃金で多くの製品を作ります。一方、技術はアメリカやインターネット上に住んでいるいろんな人たちと、比べられることを覚悟しないといけません。これらの人々と、比較されたらいじめだと言うような人には困るんですね。学芸会で全員が主役と言う話しは、お客様には受け入れられませ

ん。」
この話しは、幸恵にも納得のいく話しであった。
食事の途中にシェフが自ら皿を下げに来た。その時、田中の箸に鋭い目線を投げ不思議な笑みを浮かべたのが、幸恵には気になった。その後、田中からは耳の痛い話も出てきた。
「小論文の話しだが、論理的な文章の基本が出来ていないことが多いね。まず、事実と自分の意見を確実に分離する。客観的に評価する。三段論法の使いこなしとまではいかなくても、必要条件と十分条件の違いをきちんとする。こんな基本を守るだけでも大分違う。逆に言えば、このような基本が出来ていない。小論文の基本を勉強すると、このような点でも差がつくね。」
「手書きの練習を続けます。確かに始めた時より、書くことに抵抗がなくなりました。」
「貴女は部活で訓練の仕方を知っているようだね。微妙な成長を自分で評価する。これが出来る人は成長する可能性がある。あなたの大事な財産だよ。それから、自分で自分を褒めなさい。これも自分ひとりで成長する一つの条件だね。」

論理的な話が出来ていないのは、宿題であり少し気が重かったが、食事は楽しかった。食事が終わったとき、シェフが幸恵を手招きした。支払いのこともあるので、幸恵は慣れた厨房の方に入った。するとシェフが低い声でささやいた。
「あの人は怖い人だ。日本料理の箸先五分をきちんと守っている。」
幸恵も思い当たることがあり、ささやき返した。
「大きな会社の総務部門で、社員教育をされていたそうです。」
「やはり。」
その後、支払いをどちらがするかで、田中と幸恵の間で少しもめたが、幸恵の顔で割引があるということで、田中が支払いすることで落ち着いた。

４．自宅前での寸劇
食事の後、田中は途中だから幸恵の家まで、一緒に帰ろうと言った。幸恵も少し話を聞きたい気持ちがあり、一緒に帰ることになった。帰り道でも田中は色々なことを教えてくれた。特に、幸恵の頭に残ったのは、
「断定を出来るだけ避けること。断定したら自分として納得してしまい、ほんとの原因が見えなくなってしまう。多様な見方で“なぜ”の追求を重ねて、本質を見抜くことが大切だ。」
「仕事はスピードが大切、そのために読み書きなどの基本は、毎日訓練してスピードをつける。貴女には不要かもしれないが、計算訓練も努力する訓練としては適当だろう。」
「物事を考えるときには、極端にしてみる。そうすると本質が見えてくる。」
等の言葉であった。学校で教えてもらったか記憶にないが、こうして聞く事で、新たな知識を得たような感じがした。
家に着くと、幸恵の母利恵が門の外まで出迎えてくれた。そこで、利恵と田中が向き合った一瞬、二人の間で緊張感が走った。幸恵は、田中が左足を少し前に出し、右手を背広の胸ポケットに入れるのを見た。一方、利恵の右手は腰の辺りに引かれていた。その時田中が低くつぶやいた。
「糸東流かな、五十四歩で距離を、詰められると怖いな。」
利恵が笑いながら、丁寧におじぎをして言った。
「ご冗談を、この子が大変お世話になっています。根岸流は結構ですが。」
田中も、礼を返しながら言った。
「流石に、日本一を競っただけのことはありますね。お嬢さんの本物に向き合う気持ちが、納得できました。それでは、失礼致します。」
そのあと、家に入ってから、幸恵は先ほどの謎の問答について、母利恵に聞いてみた。利恵は苦笑交じりに説明してくれた。
「田中さんは、私が昔空手をしていたことを知っていて、試したのよ。背広の懐から何かを打とうとしていた。まるで古流の手裏剣術みたい。しかも、私の手が届く、ぎりぎりの所から飛んでくるの。これは避けられない。一番危険な武術ね。私も、一番早い技で応じるしかないと、思わず構えてしまった。」
「五十四歩とか根岸流は何？」

「五十四歩は空手の型の一つで、間合いを急に詰める技があるの。根岸流は手裏剣の流儀よ。」
「お母さんと、田中さんとどちらが強いの？」
「あの方は、武術に関する知識は大したものよ。でも体は出来ていないから、動かないと思う。しかし､実戦と言うことは別ね｡ぎりぎりの近さから､何が飛んでくるかわからない状況で戦うのは、私はいやね。しかも、含み気合を使う人は、何か怖いものがある。」
「含み気合ってなに。」
「普通気合と言うのは大きな声を出すの。でも奥義のレベルの古武術や、忍者は声を出さない含み気合を使うの。普通は、あまり戦いたくない人ね」
「ふーん。怖い人なんだ。」
「でも、幸恵のことを可愛がってくれているようね。さっきのことも、何か深い考えがあると思うの。もし古武術や忍びの技を身につけているなら、軽々しく試すことはないし、技も見せない。」
そこで幸恵はもう一つ訊いてみた。
「そう言えば、シェフが田中さんの食べ方について、箸先五分と言っていたけれど、これも関係があるの？」
「何となく解る。箸先五分と言うのは、日本料理の一流のマナーでしょう。あの人が求めているのは一流ということね。そのような話しはあった。」
「そう言えば、一流レベルを求める人間になりなさい。日本一のレベルを求める努力経験と言ってらっしゃいました。最初の喫茶店でも、大倉陶園の食器や、チーフの淹れ方を褒めていました。」
その夜、気になったので幸恵は、田中にメールを送った。

「田中和夫様
　藤田幸恵です
　今日は美味しいお食事と、貴重はお話ありがとうございました。
　お教えいただいたこと､全て理解できたとは思いませんが､少しでも実行に移したいと思います。
　さて、話は変わりますが、昨日の母との話は何でしょうか？宜しければ教えてください。」

早速、田中から返事が来た。

「藤田幸恵様
　　田中和夫です
　本日は楽しかったです。貴女が私の言うことを、よく吸収してくれるのでやりがいがあります。また、母上には大変失礼致しました。流石に、学生時代に日本一になった、空手を一寸見せていただきました。あれ以上やっていたら、あっという間に腰の右手は、脱力しているが、鞭のように私の顎に向かってきたでしょうね。生兵法は大怪我の元です。
　面接等で話題になれば、母上の日本一の話と、そのような世界を自分も知っていて、逃げないと言うことを示せれば強いでしょうね。また、私が教えるのは、空手で言えば、型の手順を教えるようなもの。自分のものにするためには、繰り返した練習が必要です。
　それでは、がんばって下さい。」
この話しを、母にすると、やはりねと笑っていた。

５．成長
その後も、田中と断続的にメールのやり取りをしながら、幸恵は就職活動を進めた。
ただし、田中に言われたことだけしているのも何か嫌だったので、大学までの往復の電車の中で、日経ビジネスを読むことにした。企業や業種を選ぶと言う点でも役に立ったが、それ以上に、それまで知らなかった、日本の企業の持っている技術や、経営方針などについて知ることが出来る点が大変面白く、苦痛になりそうな電車の往復を、楽しく過ごせるようになった。
こうしていると、だんだんメールの文章を考えるのも楽になり、すぐに返せるようになってきた。田中にも大人との付き合いが慣れたようだと、褒められた。メールでは、面接中の記憶術も教えてもらった。文章で記憶すると、面接官に違和感を感じさせるが、感情を込めて記憶すると、逆に迫力のある面接になるとわかった。

６．決定

一方、就職活動では最終面接まで進むこともあったが、内定には至らなかった。このようにして５月も過ぎていったが、幸恵はもうあせらなかった。その間、田中からも、彼の元の勤め先の受験を進められた。幸恵も第３次の募集には、応募しようと大分心が動いた。特に、田中の信頼している後輩が、社員教育をしている話しには、魅力があった。

しかし、5 月の末に東京の中堅メーカから、幸恵に内定の通知が来た。幸恵は、迷い母とも相談したが、結局その会社にお世話になることにした。田中の指導は魅力があったが、今後とも指導を受けると、依存して甘えてしまいそうな感じもして、自分の道を歩く決心をした。

田中に最後にあったとき、この話しをすると、田中も会心の笑みを浮かべて、

「貴女は、私の教えを卒業した。今回の会社は、採用条件を絞っていると思う。そこで認められた自分に自信を持って、進んでください。」

この言葉は、幸恵の一つの宝となっている。